



* M 0 5 2 6 H 0 0 7 E A 1 C M 7 F D 6 1 8 4 0 9 B 1 E 0 J 4 6 8 5 5 4 1 9 *

26日付 夕刊1面7版

2022年05月12日12時48分42秒

PDFゲラ出力

箱組

◎526付土佐尚子さん

ID=CM7FD618409B1E0J46855419

校正回数=9

52倍 0× 55行 0

現代の ことば



とさ なおこ
土佐 尚子

みなさんにとって、生きる力とは何だろうか？ 私にとってはアート作品を作ることである。それは10代の頃から変わらぬ。心の安定剤でありヒーリングであり、明日へ生きるための活力になっている。

最近の作品は「弥勒と声聞と」奈良を見守る弥勒だ。自著「カルチュラルコンピュティンク」を読んだなら歴史芸術文化村の方から奈良の文化財にちなんで現代アートを3月の同村開村に向けて制作してほしいと依頼を受けた。「弥勒と声聞」は、弥勒が

アートと防災で 「生きる力」を研究する

「声聞(弟子)という意味」に对座した権図のインスタレーションであり、私の作品の中では電気を使わないものだ。「声聞」は亀岡のガラス工房へ2年間通い、アメ状のソーダガラスを型に入れ、電気炉の中で吊るして自然な形状を作る独自の方法を編み出し、47体制作した。奈良の老若男女をはじめ、地球上に住む私たちが示す。現在、ロシアとウクライナが争っているが、異なる考えの人間が共存している姿を表している。

「奈良を見守る弥勒」作品は、円柱のテーブルの端に弥勒菩薩が鎮座し、その視線の先には、光が降り注ぐガラスの奈良県の地形がある。その光り輝く奈良を弥勒が見守っている構図のテーブルインスタレーションである。5月末まで常設展示されている。

ところで、私は5月に京都大学の大学院総合生存学館から防災研究所へ異動した。防災研究所にア

トイノベーション産学共同研究部門(凸版印刷)が出来、その部門の担当教授になった。防災研究所長から防災とアートを融合して、どんな研究をしますか？ と聞かれ、以前、防災研究の第一人者から「日本人は災害時に逃げない」と聞いたことを思い出した。「長年居た土地を離れたくない」とか「もう人生ごままで」と思うのだそう。それを知り、防災研究でアートができることは、「生きる力」ではないかと考えた。

最近の防災研究は、総合防災と違って津波や地震や水の災害の計測や分析研究だけでなく、心理学や社会学者を巻き込み、社会の中で総合的な防災の研究を行っている。私は防災研究者に対し、人を助ける気持ちの深さが違うなあと感じ、改めて敬意を表した。そこへ新しくアトイノベーション産学共同研究部門が入ることになった。私が知る限り、国立の防災研究所にアートが入っている研究所は、国際的にも見たことがない。

防災とアートの類似点は何か？ それは人間を助けること。そして、自然への理解を深め、自然の猛威に対する恐れを無くして、うまく共存していくことだと思う。昨今、SDGs(持続可能な開発目標)に加え、「人新世」(人類が地球の地質や生態系に与えた影響による時代区分)が注目されている。人間活動や資本主義によって、自然環境のサイクルが崩れるだけでなく、新しいウィルスのまん延、戦争などの人為的環境破壊も起こり、精神的にも危機にさらされている。私は人々が強く生きようと感じるアートを作ること、より良い世界に変えられる社会になることに貢献したい。

(京都大防災研究所特定教授)